

トマト・抑制（桃太郎ヨーク）

印旛農林振興センター

1 地区名

富里市十倉

2 栽培戸数、栽培面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1戸
- (2) 栽培面積 60a
- (3) 収穫量又は出荷量 33,000kg（出荷量）
- (4) 出荷先又は販売方法

J A及び外食産業（加工業者）に出荷するほか、直売所に販売

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	15回	15回
化学肥料（窒素分量）	3.6kg/10a	12kg/10a

4 事例のあらまし

富里市において、トマトはすいか、にんじん、さといも、じゃがいもに次ぐ品目となっています。また、作付面積、生産額は、69ヘクタール、2,600tと県内有数の産地となっています。

本事例農家の経営概況は、経営面積が普通畑305a、施設（パイプハウス）65aであり、労働力は4人（全て専従者）です。

経営主は、平成15年度からすいかで「ちばエコ農産物」の取り組みを始め、後作の抑制トマトでも環境に配慮した栽培に取り組もうと考えました。そこで平成16年度に持続性の高い農業生産方式の導入に関する法律に基づくエコファーマーの認定を受けるとともに、「ちばエコ農産物」の認証を取得し、堆肥等有機物資材の投入や化学肥料低減化技術により環境に配慮した栽培に取り組んでいます。

5 背景・動機

農薬に頼らない土壌消毒を目指し、平成13年からフスマによる土壌還元消毒に取り組みました。また、生産者の属しているJ A富里市西瓜部28支部は早くから無化学肥料栽培に取り組み、平成15年度にすいかでは県内初の「ちばエコ農産物」の認証を受けました。

生産者は、付加価値のため後作の抑制トマトでも環境にやさしい農業に取り組みたい

と考え、平成16年度にエコファーマーの認定を受けるとともに抑制トマトでは管内初の「ちばエコ農産物」の申請を行いました。また、売り先の一つである加工業者との契約の際に「ちばエコ」を勧められたのもきっかけになりました。



6 栽培方法

(1) 品 種

平成16年度に葉かび病が多発したため、平成17年度は一部ほ場に葉かび病抵抗性を持つ桃太郎コルトを導入しました。

(2) 土壌消毒

農薬による土壌消毒に替わり、フスマによる土壌還元消毒を行いました。

(3) 育苗

平成16年度は育苗時にアザミウマ類が多発し、殺虫剤散布を余儀なくされました。その反省を踏まえ、育苗ハウスのビニールをUVカットにして、害虫（アザミウマ類、オオタバコガ、コナジラミ類）からの保護を図りました。

(4) 定植後

ア ホリバーロールをパイプハウスのサイド一面に張り害虫の捕殺を行いました。

イ 微小害虫の侵入防止を目的に、出入口と側面にクレモナ寒冷紗#300（目合い1ミリ）を展張しました。

ウ コナジラミ類及びアザミウマ類の発生予察を目的に、黄色及び青色粘着板を一棟当たり3枚設置しました。

エ 平成16年度はトマトサビダニが発生しました。同年は害虫の同定が遅れましたが、本年度はコロマイト等で対応しました。

オ カウント対象外農薬（スピノエース、コロマイト、ポリオキシシン）の活用を行いました。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成17年5月31日
は種	6月13日、20日
耕起	6月25日
定植	7月5日、6日
病虫害防除	6月20日～10月28日
収穫開始	8月31日
収穫終了	11月30日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10a当たり)

使用銘柄 (N-P-K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
堆肥 (コーヒー粕、大豆粕)	平成17年1月15日	3 t		
エージングE (4-5.5-3)	6月20日	240kg	9.6kg	0.0kg
重焼りん (0-46-0)	6月20日	60kg		
粒状セルカ	6月20日	60kg		
追肥用S842 (18-4-12)	9月15日	20kg	3.6kg	3.6kg
合計			13.2kg	3.6kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
ネマトリンエース粒剤	ネコブセンチュウ	17年6月20日
スタークル粒剤	ハモグリバエ類	17年7月5日、6日
ベンコゼブフロアブル	疫病・葉かび病	17年7月28日
コテツフロアブル	ミカンキイロアザミウマ・トマトサビダニ	17年7月28日
トマトトーン	着果促進、果実の肥大促進、熟期の促進	17年7月28日～
トリフミン水和剤	葉かび病	17年8月11日、10月1日
※スピノエース顆粒水和剤	アザミウマ類・ハモグリバエ類	17年8月11日、10月14日
※コロマイト乳剤	トマトサビダニ・コナジラミ類	17年9月3日
アフアーム乳剤	オオタバコガ	17年9月14日
※ポリオキシシンAL水和剤	葉かび病	17年9月14日
アミスター20フロアブル	葉かび病・灰色かび病	17年9月22日
チェス水和剤	アブラムシ類・コナジラミ類	17年9月22日
ハチハチ乳剤	アブラムシ類・コナジラミ類・ミカンキイロアザミウマ	17年10月1日
ダコニール1000	葉かび病	17年10月14日

使 用 農 薬	対 象 病 害 虫	実 施 年 月 日
コテツフロアブル	ミカンキイロアザミウマ・トマトサビダニ・オオタバコガ	17年10月28日
ゲッター水和剤	葉かび病・灰色かび病	17年10月28日
化学合成農薬使用回数15回（総使用回数19回）		

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

7 今後の展望等

加工業者との契約に当たり、ちばエコ栽培をすることが契約に有利な条件でした。業者からは出荷量の増加を求められました。一定の品質を確保し出荷できる生産物を生産するには、栽培体系の省力化は難しく、現状の労働力においてこれ以上の面積拡大は困難であったため、収穫後の作業（箱詰め、出荷場までの運送）の業者委託により面積拡大（40aから60a）を図りました。なお、加工業者は一部の規格しか引き取らないため、他の規格は別の販路を確保する必要があります。

ちばエコの認知度を高めるとともに販売促進のためのPRをすることが普及拡大には必要であると思われます。また、販売先の確保をすることが普及拡大につながります。振興センターでもエコ技術の普及に加え、イベント等でのPRを積極的に行っていきます。